

江戸時代に外国に行った富山の人

今から 170 年前、日本人が外国に行くのは厳重に禁止されていました。そんなときに富山の人々が外国に行き、色々なことを見聞きし、もどってきました。なぜ外国に行けたのでしょうか？ それは乗っていた船が遭難したからです。

江戸時代の 1838 年、今の富山市岩瀬を出た船が仙台沖で嵐に会い、遭難しました。食べ物も困りましたが、最も困ったのは水がない

ことでした。やむなく海の水を飲んだ人は体力がなくなり、10 人いた乗組員のうち 3 人が船の中でなくなりました。5 か月も海をさまよった後に 7 人が奇跡的にアメリカの船に助けられました。

助けられた船は鯨を捕る船でした。元気を取り戻した彼らは、船では鯨を捕る手伝いなどをしました。その後、ハワイに 10 か月、ロシアのカムチャッカに 9 か月、ロシアのオホーツクに 1 年、アラスカのシトカに半年住みました。彼らは洋服を着たり、フォークやナイフで食事をしたり、ダンスパーティーに出席したりと見るのも聞くのも初めてのことを経験しました。ハワイではさとうきびの収穫を手伝ったり、新聞に日本のことが紹介されたりしました。当時、日本は国を閉ざしていたので、ハワイの人にとっても日本のことをはじめて知ったことでした。

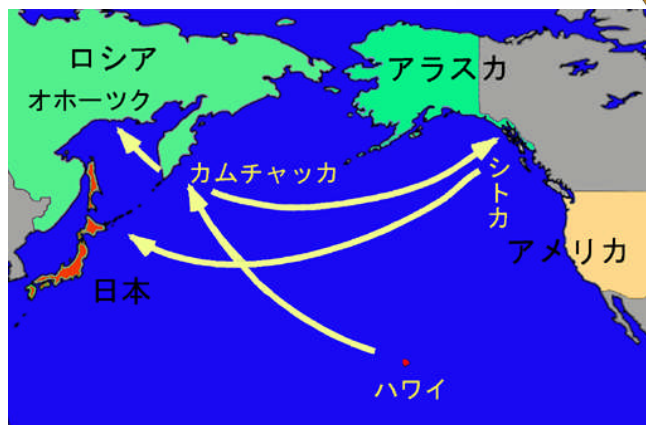
一方で、彼らも熱心に情報を得ようとしていました。天文関係では、外国で見た星空は北極星の高さがハワイでは日本より低く、カムチャッカやオホーツクでは日本より高いことに気づいています。これは地球上の緯度の違いによるものです。アメリカの船に乗っている時には日食を見ました。いつ見えたのか、太陽がどれだけ欠けていたかということを日本に戻ってから聞き取り、そこから、その日食はいつ、どこで見たかを計算することができました。また、当時の暦は月を中心とした複雑な暦でしたが、彼らは月の形を見て、月日を計算し、帰国したときは本当の暦と 1 日しか違っていませんでした。外国にいても、一生懸命考えていたことがよくわかります。

道中で覚えた言葉はロシア語、英語、ハワイ語の 3 か国の言葉でした。それらは後に本にまとめられました。今で言う辞典です。

その一部を右に紹介しておきます。

残念なことに富山にもどって来ることができたのは 4 人だけでした。彼らの見聞きしたことは 2 冊の本にまとめられ、後世に伝えられました。これらは外国の情報が少ない時代、大変貴重な本でした。ふるさとの先輩にこのような人がいることを知っていたできれば幸いです。

(2008 年 3 月 渡辺 誠)



かたじけなき事	挨拶の言葉	来る	ゆく	我に与へよ	腰をかけよ	笑ふ	小	大	猫	犬	女	男	日本
スパセーバ	ドラシト	プレシヨル	シドバイ イジヨリ	ダイミニヤ	サデシ	スミョーツ	マーレシカ	ボルショイ	コシカ	ソバカ	ゼレシレ	チヨロベカ	ロシア
タレキ	ハレロー	カム	ゴー	ゲブメー	セダシ	ダフ	スモール	ベーキ	キャツ	ドーコ	ギャル	マシ	アメリカ
アロハ マエタエ	アロハ				ノーホ	アカアカ	ペキネネ	ノイノイ	ポボケ	イレータ	ワヘシネ	カネ	ハワイ